蘭学者の夢　貧院　幼院　病院

養育院の遠いルーツ

櫻園通信　70　令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

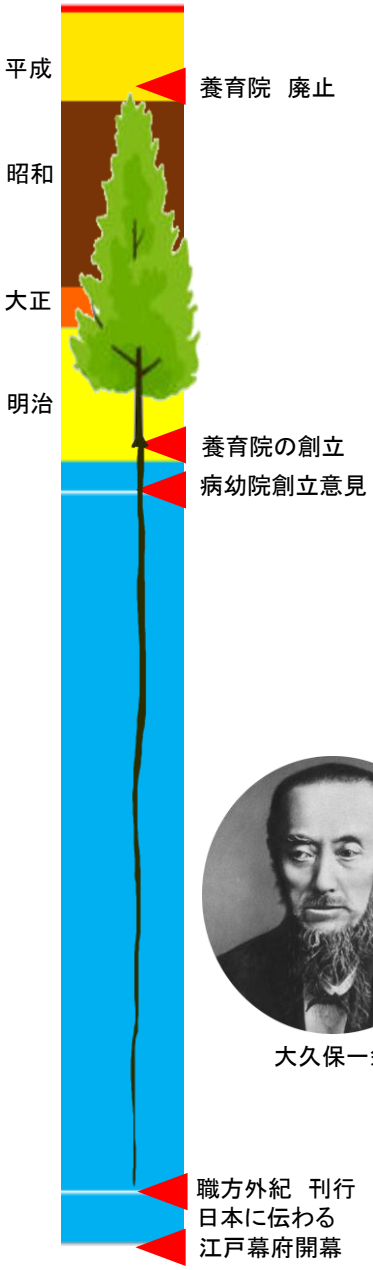
宮本孝一　老年学情報センター

大久保一翁のプラン

貧民あふれる新首都東京の府知事に就任した大久保一翁は、幕府の救貧基金「七分積金」を管理する組織「会議所」に諮問し、救貧策を考えさせます。このことと口シア皇子来日に際しての浮浪者収容とが重なり、救貧施設「養育院」が誕生しました。

大久保一翁は、もともと江戸幕府の重臣でした。一翁はそのころすでに養育院とよく似た西洋式の救貧施設のプランを持っていました。

幕末の時期、西洋社会の知識を集めていた一翁は、新施設設置プランを**病幼院創立意見**としてまとめ幕府で提案しました。しかしその直後、異動命令が出され、拒否したため左遷されてしまいます。養育院の原型である一翁のプランは幕府では実現しませんでしたが、東京府知事で実現したといえます。（桜園通信　二十一号）



大久保一翁

蘭学者は知っていた

幕臣時代の一翁は、書籍や遣欧使節団からの世界情勢の情報を集め、日本の今後の展開を考えようとする開明派でした。一翁の救貧施設のプランも、西洋の福祉施設**貧院・幼院・病院**の知識を基にしたものでした。

幕末期の遣欧使節団に同行した洋学者たちは、これらの施設について現地で調べ、その事業内容を記録しました。西洋社会の福祉事業に対する関心が高かったことがわかります。

洋学は幕末期にイギリス・フランス・ドイツから西洋の知識が入ってくるようになってできた学問です。それまで西洋の知識はオランダからもたらされるものでした（蘭学）。

蘭学者の間では、一翁のプランより二四〇年も前から幼院・病院・貧院の知識が広く知られていました。

貧院・幼院・病院の知識をもたらした本

今から四百年前、江戸幕府の将軍が秀忠（第二代）から家光（第三代）に代わるころ、中国でイタリア人宣教師とキリスト教信者の中国人により、世界各国の社会制度・歴史を紹介する漢文の書籍「職方外紀（しょくほうがいき）」が刊行されました。この書籍はすぐに日本にも伝わりましたが、キリスト教宣教師の著作であり、まもなく幕府により禁書とされました。

ただ、西洋の知識を求めていた蘭学者たちは、隠れて写本やその内容を引用した書籍を作り、禁書の「職方外紀」を海外事情を知るテキストとして二百年間使っていました。現在も全国各地の図書館に多くの写本が残されています。**幼院・病院・貧院**の知識は「職方外紀」により日本に伝わりました。現代も使われる病院という言葉は、蘭学・洋学者に使われていて、それがそのまま日本語として定着したものです。＊1

では、養育院のルーツ**幼院・病院・貧院**の知識は、「職方外紀」ではどのように書かれていたでしょうか。

「職方外紀」の現代語訳が「大航海時代の地球見聞録　通解『職方外紀』」＊2です。この本から、貧院・幼院・病院の記述部分を引用してみます。

紫色の部分が引用文です。（前掲書　p一四〇ー一四一）

ヨーロッパの国人（くにびと）は天主の正教に奉（つか）え、二つのことを守る。一つは「天主を万物の上に敬愛する」こと、もう一つは「人を己のように愛する」ことである。（略）「人を己のように愛する」とは、一、その霊魂を愛し、善を行い悪を去り、天が生んだ福を享受することであり、二、身体を愛することである。自分が人を慈しまなければ、天主も自分を慈しまない。だからヨーロッパの人はよろこんで施しをする。千年来、貧しさで子女を売る者はおらず、飢餓で路に死ぬ者はいない。

貧院　身寄りのない者を養う。その中にいる者にも仕事があり、障がいがある人や病人も見すてない。盲目の者は手足を動かし、手足が麻痺したものは耳目をはたらかせ、それぞれ担当があり、その仕事に才をつくさせ、天地の廃物としない。

幼院　小児を養育する。貧者が子を産んで養う力がなくても、これを殺すのは罪である。だから、とくにこの院を設けて、人に養育させ、子どもの命を全うさせる。その一族が貴くても家が貧しい者は、子を孤児院（幼院）に送るのを恥じるので、両方を立てる法がある。院の壁に穴があり、回転盤を設け、内と外が隔たり、互いに見えない。子どもを送る者は人に見られることなく、子を盤に置く。壁をたたけば、院の中の人が盤を回転させて、子どもがはいる。洗礼を受けたかを子の胸に明記し、時が過ぎて、父母がまた養育するなら、入れた年月によって、その子をえるのである。

病院　大きな街では数十ヶ所になる。中下の院には中下の人がおり、大人（たいじん）の院には貴人がいる。貴人のうち、旅客や使者が病になれば、この院にはいる。病院は通常の家よりずっと美しく、必要な薬は係の者が管理し、名医が準備しており、毎日病人を診察する。また衣服や寝具があり、看護の人もいる。病が癒えて去るとき、貧者には旅費を給する。これは国王や名家が設立したものであり、街じゅうの人が力をあわせてつくった。月ごとに有力な貴人がその事を総領し、薬物や飲食などは実際に試して比べる。

「職方外紀」の職方とは、古代中国の官職で、地方の異民族の状況を知り、官を送って治めさせる役職です。職方外紀とは「職方も知らない遠方世界について記した本」という意味です。

職方外紀
アジア大陸を示す図
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Zhifang_waiji1.PNG

＊1　荒川清秀．加藤周一氏の「明治初期の翻訳」について．文明21　No.3　p25-30

＊2　ジュリオ・アレーニほか著／齊藤正高訳「大航海時代の地球見聞録　通解『職方外紀』」（原書房2017）